

## 読書と一体化した学びの構築

野 本 敬

### 要旨

大学教育における読書推進や、初年次教育におけるアカデミック・ライティング指導の必要性については既に論を俟たない。帝京大学短期大学でも、2015年度より学生の学力再構築とアカデミックスキル育成に向け、現代ビジネス学科で「文書表現演習」科目を増設した。その結果、これまでの実践を通じ、「本を読み」「学んだことを文章で書く」インセンティブを授業内で与えることによって、「書く」ことを通じ学生が自ら教養を涵養していく可能性と、その繰り返し体験の必要性が明らかとなった。以下本稿では、2020年度に至る「文書表現演習」の取組みとその課題、そして今後の展望より、大学教育における読書の重要性と、学生が主体的な学びに近づくための要点について検討したい。

【キーワード】 教養教育、読書推進、ライティング指導、能動的学習（active learning）

### 1. はじめに：短大教育の現状と文章リテラシー科目「文書表現演習」の増設

#### 1.1 設置の経緯

帝京大学短期大学現代ビジネス学科では、学生が2年間の学びを通じて修得すべき能力の到達点として、卒業を認定し学位を授与するにあたっての方針、すなわちディプロマ・ポリシーを次の通り掲げている<sup>1)</sup>。

現代ビジネス学科は、現代のビジネス社会の性質と機能を探究し、この社会で活躍できる人物を養成する。また、ビジネスという経済活動を包み込む幅広い文化的要素について学び、教養と品性を兼備した人物を養成する。そして、内外の情勢に偏見なく視野を開き、物事の本質や成り行きを見通すことのできる人物を養成する。さらに、知的好奇心を常に触発して自己啓発に努め、思いやり深く、就職先や進学先で敬愛される人物を養成する。

1. 現代のビジネス社会を正しく捉え、文書作成能力を身につけ、ビジネスの現場で必要な英語力の基礎的知識を有するとともに、それらを活用することができる。
2. ビジネスに関わる諸要素を有機的に学び、実際のビジネス活動や社会生活を円滑にすべく、学外活動などを通じて基礎的なビジネスマナーを身につけている。
3. 基礎科目のみならず専門性を有する科目を総合的に受講し、人間や社会の本質的理解を目指し、ビジネス社会における諸問題を見出していくことができる。
4. 「自分流」を体得し、主体性と進取の精神を身につけ自由闊達にして責任ある言行を常とし、現代のビジネス社会で主体的に行動ができる。

加えて教育目的が以下の通り定められていること<sup>2)</sup>と併せ、短大生、特に現代ビジネス学科の学生は、実務能力と実社会に貢献できる即戦力として巣立つことを期待されているといえる。

現代ビジネス学科は、建学の精神に則り、ビジネス社会の総合的な理解とビジネス社会で必要とされる理論的、実践的知識および技能を涵養し、ビジネス社会に貢献できる人材を育成することを目的とする。

その一方、現代ビジネス学科の学生の多くには、入学したての段階では新聞記事や文章の音読ですら立ち往生するなど基礎学力の不足している者が少なからず見受けられ、入学1年後に早くも待ち受ける将来進路選択の場に立つ準備にはなお遠く、学生間の学力のばらつきもまた大きいのが実態である。現代ビジネス学科では例年学生の概ね半数が就職志望、半数が帝京大学経済学部を中心とした進学（編入学）を志望する。進学志望者の大多数が受験を希望する帝京大学経済学部への編入学試験は、専門分野の基礎知識を問う科目が課されていない点で負担は比較的軽い部類に属するが、それでも従来のライフデザイン・基礎演習のみを専門科目の必修としたカリキュラムで学ぶだけでは、学生の就職・編入学に向けた基礎学力の再構築が間に合わず、文章・社会的リテラシーの基礎訓練に特化した科目増設が2013年度より検討されるようになった。

## 1.2 「文書表現演習」科目の設置

こうした経緯から、2015年度より現代ビジネス学科では新たに基礎学力積み上げに特化した2つの必修科目が追加された。時事問題の理解を通じて社会への視点を養い、主にプレゼンテーションを主として見識を表現できることを目指した「時事問題演習」と、読書とアカデミック・ライティング訓練に特化し、短大での学びを「成果論文」（2020年度より「卒業論文」から改称）としてまとめていく「文書表現演習」である。

とくに「読書の習慣化」は長らく現代ビジネス学科における教育の懸案であったが、既

存の「ライフデザイン演習」・「基礎演習」のみでは達成し難かった点を、4つの各必修演習科目（ライフデザイン・基礎・時事問題・文書表現）がそれぞれ学生の学びを支え、文書表現演習で読書を扱いつつ学生の教養の開花を促すカリキュラムとなった。

こうして「文書表現演習」は、編入学・就職を（事実上）1年後に控える学生の漢字識字・語彙不足を再構築する喫緊の課題と、短大2年間の学びを実の伴ったものとするための読書を通じた「成果論文」指導を目標として授業が設計されることになった。

筆者が実際に携わるようになるのは2016年度からであるが、試行錯誤を経てひとまずの完成形への道筋がついた現状と課題について、以下述べていくこととする。

## 2. 「文書表現演習」科目の実践と課題：完成年度三巡目を前に

現在、現代ビジネス学科における「文書表現演習」は、1年次にクォーター制により学期の前半に集中して週2回授業の「文書表現演習Ⅰ」（春学期）・「文書表現演習Ⅱ」（秋学期）、2年次にセメスター制に沿った週1回授業の「文書表現演習Ⅲ」（春学期）・「文書表現演習Ⅳ」（秋学期）として開講されている。

この科目の目的は、漢字の識字や文章読解・作文といった基礎的な日本語の読解力と運用能力の再構築を行い、短大生の読書離れに歯止めをかけ懸案である「読書の習慣化」を図るとともに、2年次に課す「成果論文」の作成を通じて、就職志望者には社会人基礎力、そして編入学志望者には3年次以降に活かせるアカデミックスキルを獲得させ、「生きた思考力」を養っていくことである。2015年度の開講以来間もなく三巡目を迎えることになるが、以下2018・2019年度の実践を中心に、今年度2020年度に至る実践と顕在化した課題について述べる。

### 2.1.1 1年次春期「文書表現演習Ⅰ」

1年次春学期では、（今後活用可能性の高い課題として）大学公式メールアドレスを取得させ、基本的なメールや手紙のマナーを一通り体験させるとともに、学生の漢字識字をはじめとする基礎学力の再構築を図り、さらに意図的にやや負荷をかけて本を読む機会を組み込み、それについての文章を書くことを通じて、読書を軸とした学びに導くことを目指す授業設計とした。

まず、高校卒業～入社試験レベルの漢字練習のテキストを指定し<sup>3)</sup>、漢字練習の宿題を義務づけるとともに、テキスト中より毎週漢字テストを実施し、一定の基準以上の成績をキープすることを成績認定の最低ラインとした。とはいえテストの点数が（特に漢字の書き取りで）基準を割りこむこともしばしばであったため、当初は補填措置を講じていたが、現在では一定基準以上の得点を加点措置の一部として扱っている。

続いて、毎週の新聞の書評欄チェックを義務付けた。その主な目的は、「本の内容をコンパクトにまとめて説明する」ための見本となる文章に触れさせることである。（既に新

聞を紙媒体ではとっていない家庭が多いため、新聞は原則図書館でチェックさせることで、  
 ともかく図書館に出入りする機会をつくり、敷居を低くすることも狙いの一つである。)
 さらにスクラップノートを一冊用意させ、掲載されている書評文のうち関心をひかれたもの  
 をスクラップ・コメントを付し毎週提出させ、平常点の加点要素として成績評価の一環  
 とした。これは「書評」の見本にふれる機会を増やすと共に、スクラップ作業を通じて幅  
 広い新刊情報に触れてもらい、多様なジャンルの本が出版されていること、そして学期末  
 に一定程度蓄積されたスクラップをふりかえることで、学生が自身の興味関心について再  
 認識させることを意図している。これは2年次で成果論文のテーマを決める際、自分の興  
 味関心の在り処とその関連著作を捜す糸口をつくる効果も射程に入れたものである<sup>4)</sup>。

受講生全員に公式メールを取得させた後は、今後の連絡や課題提出の手段を全てメール  
 経由として、一定のマナーや形式を踏まえたメールの送受信やファイル添付など基礎的な  
 操作について繰り返し実践する機会を設けることとした<sup>5)</sup>。

これらの毎回のルーチンに加え、清水ほか(2011)、野矢(2001)・(2017)、松浦(編)  
 (2017)をはじめとするライティングやリーディングの参考文献よりプリントを作成し、  
 文章読解のポイントや文章作成の上での文末表現や接続詞などを項目別に学習させる。た  
 だそれだけでは無味乾燥な「国語の授業」の劣化版にしかならないため、学生には「読  
 書」の嚆矢としてまず図書館の蔵書より興味のあるブックレット1冊を選択させ、書誌情  
 報の見方、1冊の本の「読み方」のポイントを解説した後、毎週スクラップしている書評  
 記事を参考に800～1000字程度の「書評文」を作成してもらうこととした。事前に解説  
 したポイントを踏まえているかについて、開講当初は教員側が添削をしたこともあった  
 が、結局教員の指示通りに書き直すに留まることがほとんどとなったことから、この3年  
 ほどは提出した「書評文」を相互に査読・校正させ、フィードバックをもとに推敲版を再提  
 出させる方式に変えた<sup>6)</sup>。結果的に(些か粗はあるものの)書く側・読む側双方からの視  
 点を意識する機会が盛り込まれた「書評課題」となっている。2019年度からは図書館主  
 催による「新書」1冊をネット上のグループで読み進めるワークショップ「読書術」<sup>7)</sup>の  
 実施対象科目となったことで、さきにブックレットを対象として行った作業を、厚みを増  
 した新書で繰り返すことになり、相乗効果を発揮しつつあるように思われる。

なお、2016年度から2018年度までは、夏期休暇中に暑中見舞いとレポートの課題を課  
 していたが、あまり首尾がはかばかしくなかったため、2019年度以降は実施していない。

### 2.1.2 1年次秋期「文書表現演習Ⅱ」

1年次秋学期は、春学期のルーチン(漢字練習、漢字テスト、書評記事スクラップ)を  
 踏襲するとともに、複数の書評文、そして特定のテーマに基づく合評文の作成を目指すも  
 のとしている。

まず学生に書評記事スクラップの振り返りを行わせ、新聞の書評欄には①800字前後の

やや狭い欄と②1000字程度のやや大きい欄とがあり、加えて月一回複数の書籍・論文を合評する③1600～2000字程度の「論壇時評」「文壇時評」的な合評文と概ね3種あることを認識させる。そのうえで、自身の興味関心に沿って3種(新書、選書、更にもう1点単行本か論文)を検索・選択させそれぞれについて①600字②1200字の書評を作成し、相互講評によりブラッシュアップするとともに、最後にテーマを同じくする任意で選択し

文書表現演習Ⅱ			
回	日付	曜日	実施内容
1	9/10	月	・ガイダンス①:今期実施予定連絡 ①夏季課題回収 ②今期ルーチン(漢字練習、短文要約):漢字テスト→ <b>席替え</b> ③今期大課題について:各自のテーマに従いキーワード準備の宿題 (1)新書サイズ書評(600字)→相互講評 (2)選書サイズ書評(1200字)→相互講評 (3)上記(1)・(2)に併せプラスαで1600字合評文→提出
2	9/17	月	・ガイダンス②:論文キーワードと情報収集について ①夏季課題回収締切 ②新書と選書の判型解説 ③論文キーワード実例を示し、意義と検索の用途使用を解説 ④ <b>テーマとキーワード(暫定)を提出</b> させる
3	9/19	水	・大課題ルーチンの確認と解説 ①次回で本の選択(テーマに従い2冊選んでしまうこと。読む時間がかかる) (1)テーマに関連した書籍の検索方法、選択方法について読書術応用 (2)その先のプラスαをどうするかも見越すと良い (3)次週9/26、MELICAct2にて実習、テーマとキーワードを固めてくる ②「査読」分担制提案。第一段階:体裁チェック、第二段階:内容確認 ③ルーチン図式化→配付、 <b>ループリック(評価基準)</b> は後日。 ④ <b>テーマとキーワード(第2案)を提出</b> させる
4	9/26	水	・MELIC検索ガイダンス@Act2情報学習室2、 ①準備したキーワードをもとに候補検索 ②プラスαをどうするか候補検索開始 ③さっそく図書館から新書・選書を借出す。さっそく読み始めること
5	10/1	月	・漢字テスト① ・「レポートの書き方」本より守るべき体裁について整理、箇条書きで <b>提出</b> 。 ・選択した書籍①・②を報告、テーマ確定→ <b>提出</b> 。 ※なぜそのラインナップかコメントを付す。 ←コメンテーター査読が可能か、テーマ選択を確認。
6	10/3	水	・ <b>席替え</b> ・短文要約①:「5 文章の幹を捉える」より例題from野矢茂樹『大人のための国語ゼミ』山川出版社、以下同
7	10/9	火	・
8	10/10	水	・
9	10/15	月	・漢字テスト② ・ <b>新書①600字提出</b> 、ランダム体裁チェック。書籍回収、返却→査読者即借り出し。
10	10/17	水	・ <b>席替え</b> ・短文要約②:「4 きちんとつなげる」より例題
11	10/22	月	・漢字テスト③ ・ <b>新書①査読結果提出</b> 、執筆者へ通知、10/29or10/31までにリライトし最終版をメール添付で提出。 ・ <b>選書②1200字要約提出</b> 、ランダム体裁チェック。書籍回収、返却→査読者即借り出し。
12	10/24	水	・短文要約③:「4 きちんとつなげる」より例題
13	10/29	月	・漢字テスト④ ・ <b>選書②査読結果提出</b> 、執筆者へ通知、11/5までにリライトし最終版をメール添付で提出。
14	10/31	水	・短文要約④「 <b>語りたいことを整理する</b> 」より例題 ・プラスαの探し方/候補提出、タイトル決め:合評のポイント
15	11/5	月	・漢字テスト⑤ ・3点目:プラスαについて内容紹介と選択のポイントをA4判1枚で記述。
	11/12	月	・ <b>プラスα合評③1600字提出期限</b> 、最終評定へ

(この年の10/9・10/10は著者急病のため休講、後日補講を実施したため空欄としてある)



## 読書と一体化した学びの構築

た「+1」の文献を加え、③ 1600 字合評の作成を求めるものである。

これは次年度成果論文作成にかかる際のテーマ選定、研究史・資料収集整理のプレ実習の役割も兼ねている。最も進捗の順調な 2018 年度の場合、スケジュールは前掲のとおりであった。

### 2.1.3 2 年次春期「文書表現演習Ⅲ」

従前の大学短大現代ビジネス学科における「成果論文」はしばしば（多くがネット上の

文書表現演習Ⅲ			
月日	ねらい	回数	講義目的・内容
4月11日	ガイダンス	1回	①公式メールアドレス取得させる → 今後提出／指導用として ②今後のルーチン説明（4/16より開始） 平常点：【月】漢検準2級レベル小テスト60%以上+補填の漢字練習帳チェック 【水】新聞書評欄より興味を引かれるものをコピー、ノートに貼付しコメント付で提出
4月18日	資料調査	2回	図書館またはAct2にて進路（編入学、就職）確定及び論文テーマ選定のために有用と判断できる書籍を検索させる。 基礎演習の5/15メ切的課題とリンク ①→今学期中に読破する卒論下調べのブックリスト第一弾（5冊）を作成、提出。 ②→ 上記①より基本文献1冊を選んで借出し、 「要点整理および論文構想への展望（以下参照）」を200-1600字でまとめ、5/16までにメール添付で提出。 ※以降5/30、6/13、6/27、7/11に残りの関連文献4冊について800-1200字の報告を挙げる。 ※ 調査の進展に従いリストは適宜改訂可。差替えの場合はその都度再提出すること。 ポイント ～論文構想への展望：自分が漠然と考えている卒論テーマに対して ・（要点整理）その本は何を扱っていて、何を明らかにしているか ・自分にとっては何が（事実、データ、考え方）わかったか ・自分が知りたい、取り上げたいことは何で、今回読んだ本の内容から何が言えるか ・それでもわからないこと、今後の課題は何か
4月25日	論文の体裁について	3回	相互に書簡文下書きを配付プリントに基づき講評、明治大経営学部学生レポート集『蒼樹』を素材に完成度を確保、タイトル／先行研究整理／章立て／註／参考文献表記について要件・様式を学ぶ
5月9日	情報源明記実習	4回	4/18作成のリストを相互に交換、OPAC、Cinii、NDL-OPACなどによる書誌情報の欠落埋め合わせ作業を通じ、参考文献情報の重要性を体感する
5月16日	調査手段の確認	5回	【基本文献レポート①提出】 ④Act2「調べ方」実習① ・例えば「イ族」「彝族」「ドナルド・トランプ」などをスマホで調べ、内容は箇条書き及び情報源（wikipedia、コトバンク、naverまとめ）を明記。 ・可能であれば同一項目を各国語版wikiなどで比較、（自動翻訳経由で）相違を検証し、コメントを付し提出
5月23日	調査と発表A 1	6回	④Act2「まとめサイト」問題の調査と報告 DeNA運営による「WELQ」「MERY」等の問題を中心に個別調査 ・まとめサイトとは何か、何が問題なのか ・なぜまとめサイトが必要となるのか ・まとめサイト上の情報の正確性を確かめるために何が必要か 個別にスマホorPCで調査、結果をまとめ提出。
5月30日	調査と発表A 2	7回	【関連文献レポート②提出】④8号館 前回作成した個人報告書をベースに4人程度 1 チーム× 4 毎に発表資料（PPT）を準備
6月6日	調査と発表A 3 - 1	8回	2チームのPPT発表（各チーム、20分）、質疑応答、評価表作成 PPT資料の完成度、報告内容・態度及び聴講者フィードバック
6月13日	調査と発表A 3 - 2	9回	【関連文献レポート③提出】 2チームのPPT発表（各チーム、20分）、質疑応答、評価表作成 PPT資料の完成度、報告内容・態度及び聴講者フィードバック
6月20日	【予備日①】	10回	【調整日】進捗次第でMELICデータベース講習会④Act2
6月27日	調査と発表B 1	11回	【関連文献レポート④提出】 レジュメ発表の作法と質問・討論の作法について wikipediaの課題調査と報告；個人報告書は宿題として事前準備 ①4チーム毎にレジュメをまとめ発表準備
7月4日	調査と発表B2	12回	②各チーム間で順番を決めて報告（後発組は内容の補足によりポイントup） ③相互評価表及び個人別ミニレポート提出
7月11日	卒業論文案内	13回	【関連文献レポート⑤提出】 これまでのリスト変遷と提出レポート・書評欄採用書誌のすり合わせ →成果論文のテーマ修正／絞り込み、進捗ふりかえり
7月18日	【予備日②】	14回	【調整日】進捗次第でMELIC 2 Fより指定論文検索・入手作業 先行研究リスト化→自身のテーマとの関わりを回顧と展望式に整理、最終回までに提出
7月25日	まとめ	15回	論文進捗報告書記入、夏季課題発表

記事の) 寄せ集めによるまとめのものに終わり、文献の読み込みを基礎とした論理的展開を為すまでに至らないものが大半であった。そこで2017年度より滝川(2014)などを参考に、①仮テーマに基づく先行研究の調査②ブックレポートによる把握と蓄積、文章による表現への橋渡しを主な授業内容とした。

前頁表は2018年度のスケジュールであるが、5冊のブックレポート+先行研究リストの選定による卒論テーマの明確化を掲げた。この年は特に「まとめサイト」の弊害が話題をよんだこともあり、情報源としてのネット情報(wikipediaやまとめサイトを利用することによる問題点を実習)リテラシーに関する討議を実施したことが特色である<sup>8)</sup>。

実際に毎年提出されてくる論文を評価するようになって以来、教員としては体裁や質について失望を禁じ得ないものも少なくなかったが、ある時、そもそも学生たちは入学以来「論文」「レポート」と名のつくものを読んだことがないという事実気づかされた。学生にしてみればこれまで見たことがないものを指示通り仕上げて提出してくることを要求されること自体が無理難題である。そこで、2018年度よりお手本としての同年代の書いたレポート<sup>9)</sup>や河野(2017)を例に、「論文の読み方」と論文・レポートの備えるべき要件についての手ほどきを加えることにした。2019年度からはあまりに拡散しがちな学生のテーマ選択に一定の歯止めをかけるべく、“ビジネスに関わる内容とすること”と指定したこともあり、経済系の論文の見本を提示する必要が生じたため、“労働関係優秀論文選”より平易なものを選び、輪読・解説の機会を設け、論文の完成像をイメージできるよう心掛けていた<sup>10)</sup>。

#### 2.1.4 2年次秋期「文書表現演習Ⅳ」

2年次秋学期はいよいよ本格的に成果論文の執筆を開始する時期である。ただ実際には夏季休暇中に急遽テーマを変更したりと学期開始当初は学生の方針も不安定であり、適宜面談を通じて助言を加え具体的な断章作成と指導の反復を目指す。

学期当初は論文構想報告会(2クラス合同・学年全員で、Actriumなどで一堂に会して実施する)に備え報告で提示するレジюмеの作成をチェックする。レジюмеに示される内容がすなわち篇別構成であり、テーマ設定と先行研究の整理・利用資料に結論見込みと論文の骨子となるため、内容面について報告に足るものとさせる。実質的にはこの時期になってようやく資料収集のための情報検索が当を得たものになってくるので、最後の一押しとして検索ガイダンスを再度実施する。

この際取立てパワーポイントのスライド資料ではなく、紙のレジюмеをつくらせるところは妥協しなかった。どうしてもパワーポイントによる報告は「曖昧なまま誤魔化せてしまう」性質があり、後に残らないことで報告後の継続指導にも難があると考えたためである。学生にとっては「流すことができない」負担感があつたようではあるが、最終的に自らの見解を落ち着いて表現するに至った学生が体感的に増えたことは、一見クラシックな

指導法が思考を培うには効果的であることを示唆している。

報告終了後は、教員コメントとともにテーマが接近する学生同士の相互評価とコメントをもとに論旨を再検討させ、一定の目途がついた学生から論文の一部の断章を書かせ、コメントする個別指導に移行する。2018年度の場合、スケジュールは概ね以下の通りに推移した。

文書表現演習Ⅳ		
回	日付	実施内容
1	9/19	・ガイダンス：今期実施予定連絡 ①10月末～11月合同卒論報告会、 ②論文骨子のレジュメ作成の指導、報告の準備。 (1)合同構想報告会の準備 (2)論文の具体的な文面を <b>草稿</b> をもとに <b>個別指導</b> 。 (3)論文タイトルとキーワードを考えてくる宿題を課す。 ・漢字試験対策：編入学2次3次及び社会人基礎力として毎週実施。
2	9/26	・ガイダンス：論文キーワードと情報収集について ①先行研究の網羅と自論用データ収集のためキーワードより検索 ②個別面談中、次回MELIC検索ガイダンスに使うキーワードを準備 (1)実際の論文の事例配付 (2)未見の先行研究や、自論に使えるデータを実際に検索させる (3)現時点での論文タイトル(仮)と検索キーワードを提出させる； 必要があれば適宜検索キーワードを追加提案する ・漢字テスト①
3	10/3	・MELIC検索ガイダンス@Act2情報学習室2、 ①準備したキーワードをもとに実際に情報を収集させる ②検索結果を一覧リストにまとめ提出、以後調査状況をチェック
4	10/10	・A4判×2→A3判一枚レジュメ作成指導①、原稿①宿題
5	10/17	・A4判×2→A4判一枚レジュメ作成指導②、原稿②宿題
6	10/24	・A4判×2→A5判一枚レジュメ作成指導③、修正稿をメール送信
7	10/31	・レジュメ集配布：報告・質疑応答／コメンテーター役割指導
8	11/7	・報告会を経ての論旨修正など個別指導
9	11/14	・報告会を経ての論旨修正など個別指導
10	11/21	・報告会を経ての論旨修正など個別指導
11	11/28	・個別草稿チェック
12	12/5	・個別草稿チェック
13	12/12	・個別草稿チェック
14	12/19	・個別草稿チェック
15	1/9	・卒論要旨作成

この年度では十分なフィードバック（朱入れ等）は出来なかったが、結果的には手を出さず口頭の指示中心であっても予想以上の学生の成長をみた。教員による添削も善し悪しであり、ともすれば「教員に指示されたとおりに直せば大過ない」とばかりに学生自身の思考を放棄させ教員に依存する態度を助長しかねない点は注意を要する。そのため、2019年度からは修正が必要な部分を示すのみとし、どのように修正すべきかは学生自身に問いかける形式とした。これに有用であったのがライティング指導にあたる大学教員間でSNS上に共有されている「指示をゴム印でつくり、指摘の箇所に押印していく」方法であり、筆者も早速模倣し2019年度より活用している<sup>11)</sup>。学生の学習環境を見る限り、ま



だすべてをPC上・PDF上でやりとりするには至っておらず、論文や資料のやりとりは紙媒体の朱入れを活用する方が効果的な印象がある。

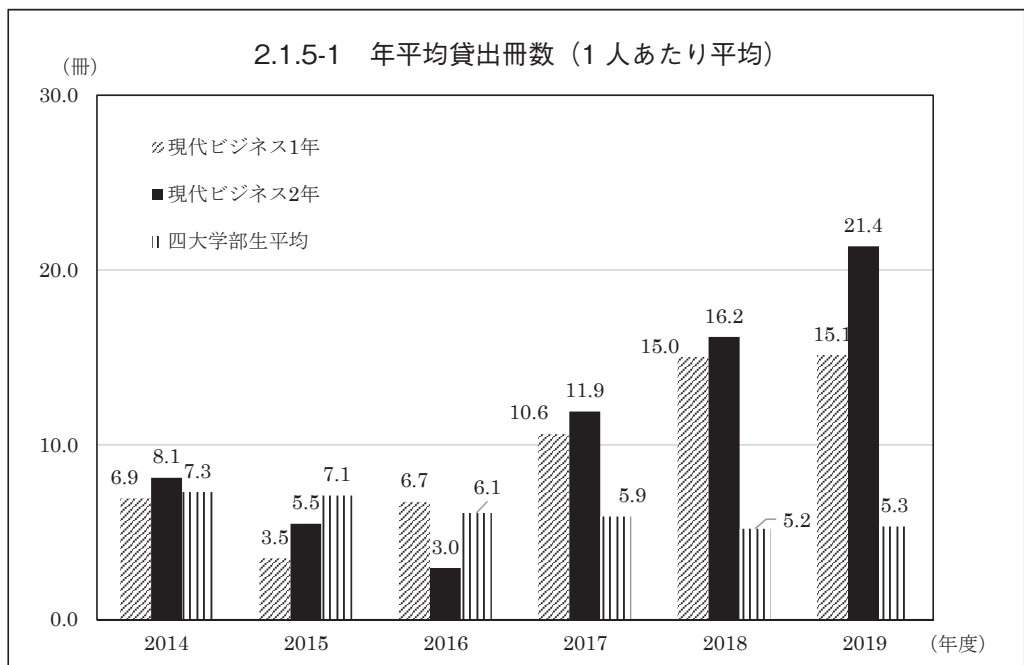
これらの断章を最終的にワープロソフトにより切り貼りで順序を整え、清書（印刷）させて事務窓口に提出させる<sup>12)</sup>。最終回は自分の提出した論文要旨を作成させることとした。

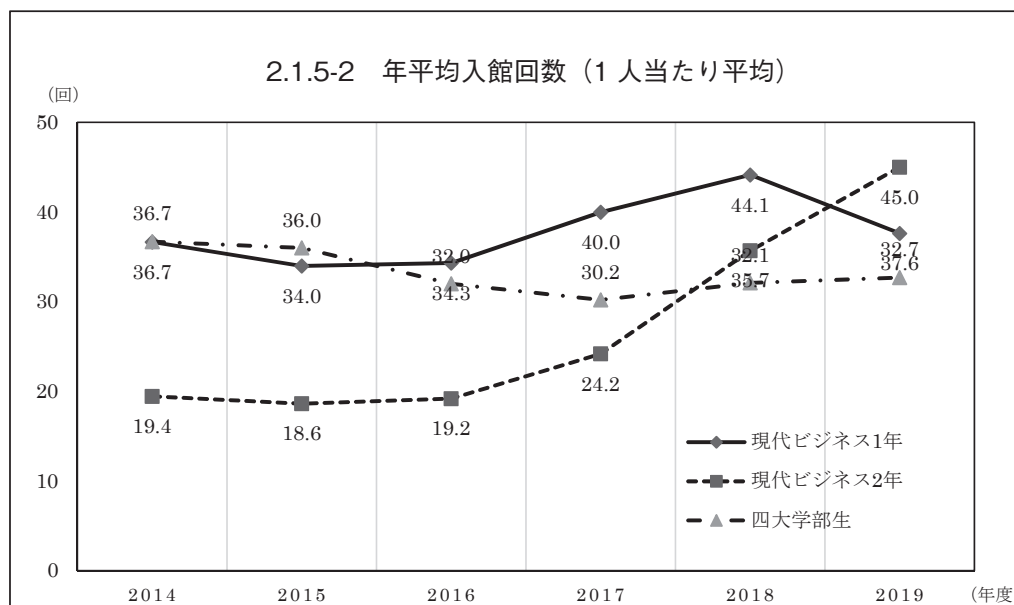
残る課題には、本学科における「成果論文」は口頭試問にあたる精査の場がないため、未熟な出来でも「出し逃し」に近い状態で提出してくる「開き直り」を抑止できない難点があった<sup>13)</sup>。2020年度はこの傾向に一定の歯止めをかけるべく、提出期間を前倒しし、授業最終日に要旨をもとに口頭試問に近い緊張感を伴う「最終報告」を設け、かつ秋学期授業開始時に論文要項を事前に公表する中に成績評価ルーブリックも設定、全て公開してしまうことで、学生が自発的に要求水準に向け努力することを促す措置を試みており、今後その効果を検証していくことを予定している。

### 2.1.5 科目設置による効果

こうして意図的に読書を課題に組み込んだ授業設計とすることで、大学短大現代ビジネス学科学生の読書量は顕著に増加をみせている。2019年度図書館基本統計に基づくグラフ2.1.5-1・2に顕著である通り、授業内に読書を不可欠の要素として組み込んだ「文書表現演習」設置以降、短大現代ビジネス学科の図書館利用頻度と読書量は四大学部生の平均を超えて大幅に増加している。

学生の読書量機会と冊数を増やすためには通常の授業内で読書とそれに関わる文章作成





※ 共に図書館基本統計より作成。

を課題のかたちで盛り込むことが有効であることがわかる。更に、2年次において1人当たりの貸出冊数が顕著に増加している点は、成果論文に際して文献調査を課せられているだけでなく、1年次の経験から本を手にとることへの抵抗感が減じていることも一因と考えられる。

成果論文の質も次第に向上してきており、「文章を書く」繰り返し経験が一定の効果を挙げつつある可能性に加え、実のある読書経験のためには一過性の読書イベント的なものにとどまらない、日常の授業内での反復実施こそが重要と考えられる。

2016年度、担当開始当初に試みた所謂「国語（現代文）」的授業では学生の関心・教育効果共に低空飛行であって、2年次の論文の出来栄も芳しいものではなかったが、2018年度以降については、目下充分なフィードバックこそ充分ではないものの「本を読ませ」「（基準に沿って）書かせる」取り組みの反復で、結果的に大多数が一定程度の基準に達した。

実際のところ学生の書く文章は、最初こそ見るに堪えないが、教員が時間を割いて赤字修正或いは相当の部分を書き換え「指導」したところで、学生は言われた通りに書き直すだけにとどまることがほとんどである。学生の立場からすればその過程で実際に何かを学んだ自覚があるわけではないので、別の箇所でも同じ誤りを繰り返すことも少なくない。

2018年度及び2019年度提出の論文を見る限りでは、多くの文章に触れ、自身で読み返しつつ取り組んだ（と思われる）論文は最終的に一定の水準に達しており、早期に論文の「型」を示し、それに向け努力させる授業設計の方が効果的と思われる。教員はしばしば最短距離を「指導」することでつい手を入れ過ぎてしまうが、むしろ間接的な「指示」に

留め、学生自身に求められる水準を徐々に自覚させ、自発性を引き出す方が長期的に良い効果をもたらすようである。

内容および文章の形式についても、実践の積み重ねによって学生自身がしかるべき水準を体得し、学びを深めるにつれその自己に課す水準の意識自体もまた成長させていくことで、学んだことを生涯にわたり人生を支える教養へと深化させていくといえるのではないだろうか。

## 2.2 顕在化した課題

とはいえ現状対処の目途が立たない課題も少なくない。

### 2.2.1 基礎学力の不足

今回設置された「文書表現演習」は、従来のライフデザイン演習・基礎演習のみでは対応しきれなかった基礎学力の補填、すなわち短大生に顕著な（そして少なからず四大生にも通底すると考えられる）漢字や語彙、そして文章読解力や作成技術などについて対応する科目であることは既に述べた。

それでも1年次クォーター制の場合週2回（但し学期の半分、残り半分は別科目：時事問題演習開講のため事実上空白）・2年次セメスター制の場合週1回の授業内でトレーニングできる範囲は自ずと限りがある。例えば漢字の読み書きや語彙については、2019年度までは効果的に教育できている手応えがなく、事実漢字テストの得点推移からみる限り、出来る学生は最初から出来ており、芳しくない学生はほとんど好転せずに終わるケースが大半であった（2020年度1年次においては多少異なる兆しが見えるが、現時点での判断は保留としたい）。この現状に更なる対策を講じるとすれば、「読解力強化」や「文章作成・日本語ライティング特訓」に特化した科目を増設することが考えられるが、一律の科目とした場合、既に一定水準に達している学生にとっては退屈極まりない授業となり、意欲低下をもたらす弊害が予想される。むしろ単発講座あるいは学修支援において対象学生を個別にエンパワーメントする手だてを強化するなど、専門チームへと切り分け担当してもらうことが望ましいのではないか。

ただ日本語の読解力は普段の生活の中で訓練されてきていることを考えれば、本来は大学に入学してから授業内で速成する次元の話ではなく、入学者受け入れ方針：アドミッションポリシーに「基本的な学力を身につけ」と謳うように、入学を許可する時点で一定のハードルを越えていることが原則である。本来の短大・大学の在り方としては、学生は受験勉強を通じ最低限必要な読解力や文章技法・数的思考を身につけたうえで入学してくることであることには意を留めておきたい。

現実には様々な学生が入学してきていることは否定できないものの、スポイルした内容の「分かりやすい」授業で実態を看過し、水準に達していない学生でも進級できる状況を放置することは、結果的に卒業時の学生の質保証に影響し、長期的には本学の価値の毀損

につながることを考えれば、一律的な初年次教育から必要な学生に向けオプションプログラムとして個別の補習講座を設置・充実させていくことは当面必要な措置である。

### 2.2.2 検索の「前段階」としての語彙・体系化・「選球眼」の課題

加えて、文書表現演習の実践を通して学生の「選択眼」の課題が可視化されている。例えば検索を行った際、大量の情報が出てきたときの取捨選択や、大量の情報をいかに自分なりに体系づける「見識」を育むかについて、大きな問題が横たわっていることがわかった。

例えばネット検索のための「キーワード」を思いつくことができず、検索に着手できない学生は決して少なくない。「キーワード」を発想する手ほどきについては、2年次の論文テーマ決定時に際して依頼している MELIC 検索ガイダンスにも意図的に内容に組み入れているが、目下顕著な効果は生まれていない。その結果、少なからぬ学生で信頼のおけるデータベースにおける検索結果の絞り込みよりも、思いつきで検索した結果にそのまま飛びつく傾向が見られ、時に表示先が広告であったり、素人による「まとめサイト」であったりするにもかかわらず、提示された情報を吟味できず鵜呑みにして事足り、とする姿勢からは、教わったはずの検索エンジン最適化などのしくみに全く無頓着であるばかりか、「調べようとする事柄」にあたりをつける目的で適切なキーワードを選び出すための基盤となる「何か」を欠いているためと見なさざるをえない<sup>14)</sup>。

これは OPAC などで大量の書誌情報が出てきた際、或いは書棚に並ぶ本から最初の一冊を手にする際、何故か多くの学生で真っ先に選ぶべきでない劣悪な方を掴んでしまう傾向をどうするか、という問題にも通底する。既に学生には1年次より、質の担保されている本を選ぶ際の目安として、①定評のある出版社からの発行であること②著者が大学教員など専門の研究者であれば、その分野についてはある程度信頼が置けること③実務家が経験をふまえて書いたものやジャーナリストが取材によって書いたものは一定の参照価値がある、などの基準は伝えており、奥付や著者略歴・目次から概要を把握するなど一通り弁別の方法も示してはいるものの、いざ論文準備の参考資料として本棚からつかんで来るのは、なぜかここ十数年に急増した実態不詳の「コンサルタント」などの肩書の著者による空疎なビジネス啓発書や、有名人が根拠なく放言するような本ばかりとなってしまうことがしばしばである。近年書籍の装丁やデザインが工夫をこらしたカラフルなものになったことは悪いことではないが、以前にもまして装丁を目安とした玉・石の目利きがしづらくなった点は、どのように指導したものか目下妙案がない。

また、学生は小・中・高の経験を通じて既に「授業で教員から伝達される一意の「正解」である知識を自らに蓄え、試験時に放出する」こと——筒井（2006）の指摘する「知識の伝達—貯蔵モデル」への過剰適応と同義——こそが「学び」であると内面化してきたふしがある。かつ学びには「範囲」があり、科目間の繋がりについては半ば意識的に遮断する傾向すらみえる。しかし実際の世界は虚実入り混じる「さまざまな」知識があり、

「判断」を下すためには身についた総体からの「引き出し」で対応するよりほかはない。本の目利き、ネット上の情報の選球眼の悪さの一因は、「判断」を支える知的な働きの未熟あるいは怠慢であることがその本質であろう。知識とは、「断片的」な「総量」が問題なのではなく、それを活用するために自らに「体系づける」ことこそが意識的に訓練されるべきことであり、今後カリキュラム全体を通して学生に方向付けを与えていく設計を考慮することが重要である。

教員が日々の研究活動においてほぼ無意識に行っている、膨大な情報から必要な場面で・必要な知識を体系化して取り出す資質こそは、学生が卒業までに体得すべき「スキル」といえるであろう。それらを具体的にいかに培うかについて、現時点で名案があるわけではないが、書物・読書を根幹に据えたクラシックな（或いは古典的な）大学における学びのスタイルは、存外にそれらを間接的に培うものであったかもしれない。

「問い」をたて、理解する枠組みに必要な知識を調べ・論点を網羅・体系化し、「論文」と「討論」を通じて考察すること。自分の身の回り四畳半の世界を越え、未知の、或は一見無関係な世界の事柄についても、敬意をはらいつつ理解を投企しようとする営為は、実に大学での古典的な（専門）教育と本質的に通底するものではないだろうか。

### 2.2.3 読書を組み込んだ「学び」構築の必要性

学生の読書離れが喧伝されて既に久しい。1年次文書表現演習の初回、筆者は短大に入学してくる学生に入学前1年間の読書冊数（教科書・参考書・マンガを除く）を尋ねることを常としているが、（一部に小説など読みふける者がいないではないが）回答の大半は「ほぼゼロ」である。

これは学生の不勉強さを示すわけではなく、現代の一般的風潮を示しているにすぎない。過去12年間の学校読書調査によれば、1か月に1冊も本を読まない高校生は既に半

表 2.2.3-1 1 か月平均書籍読書（冊数）

年	小学生	中学生	高校生
2008 年	11.4	3.9	1.5
2009 年	8.6	3.7	1.7
2010 年	10	4.2	1.9
2011 年	9.9	3.7	1.8
2012 年	10.5	4.2	1.6
2013 年	10.1	4.1	1.7
2014 年	11.4	3.9	1.6
2015 年	11.2	4	1.5
2016 年	11.4	4.2	1.4
2017 年	11.1	4.5	1.5
2018 年	9.8	4.3	1.3
2019 年	11.3	4.7	1.4

表 2.2.3-2 1 か月間 不読者推移（％）

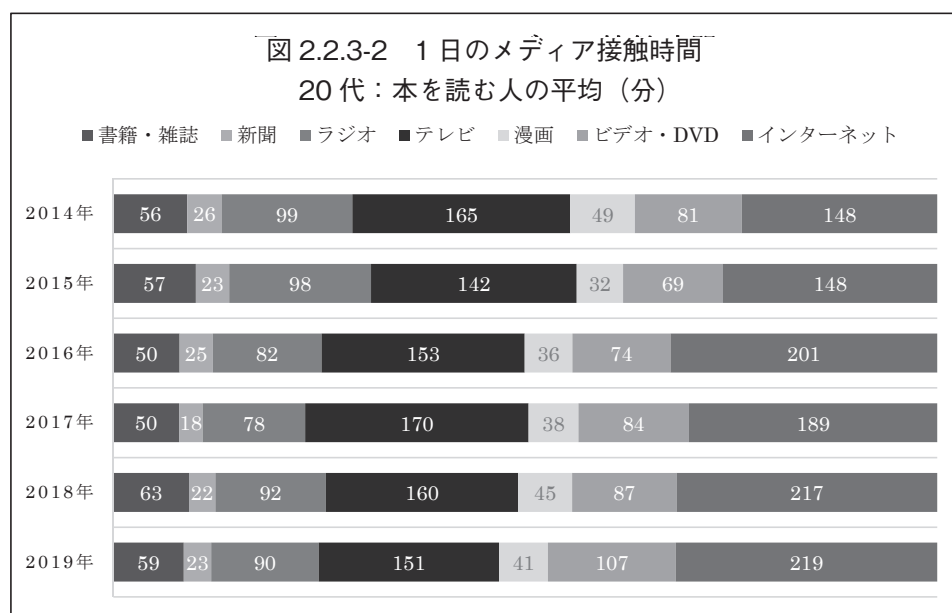
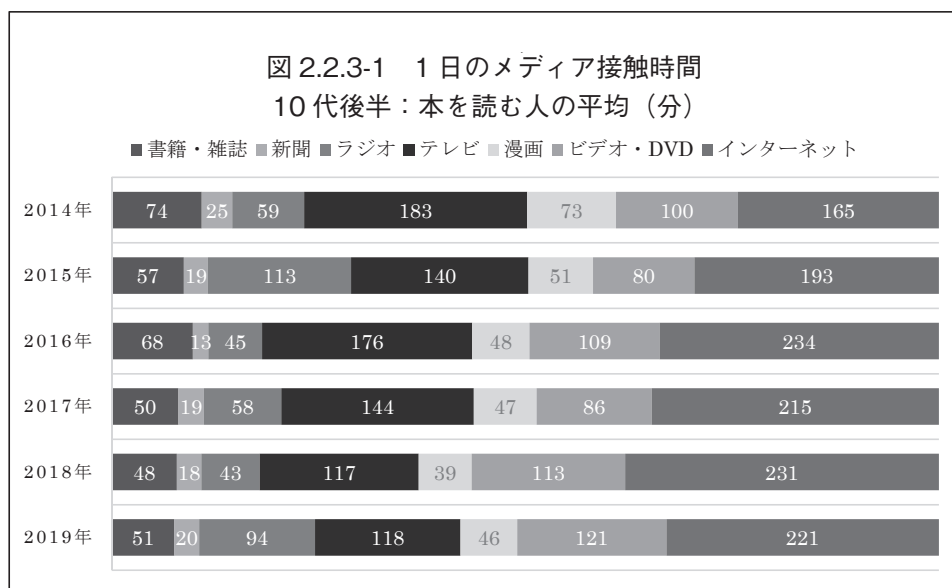
年	小学生	中学生	高校生
2008 年	5	14.7	51.5
2009 年	5.4	13.2	47
2010 年	6.2	12.7	44.3
2011 年	6.2	16.2	50.8
2012 年	4.5	16.4	53.2
2013 年	5.3	16.9	45
2014 年	3.8	15	48.7
2015 年	4.8	13.4	51.9
2016 年	4	15.4	57.1
2017 年	5.6	15	50.4
2018 年	8.1	15.3	55.8
2019 年	6.8	12.5	55.3

※ 学校読書調査より作成。



数以上を占めており、1 か月平均冊数も 2 冊未満とごく僅かであるのが実情である。

また、過去 6 年間の読書世論調査のデータより 1 日あたりのメディア接触時間の平均をみると、下記に示す通り、10 代後半から 20 代にかけては、本を読むと回答した者でさえその時間は限定的であり、むしろネットに触れている時間が圧倒的に多いことがわかる。

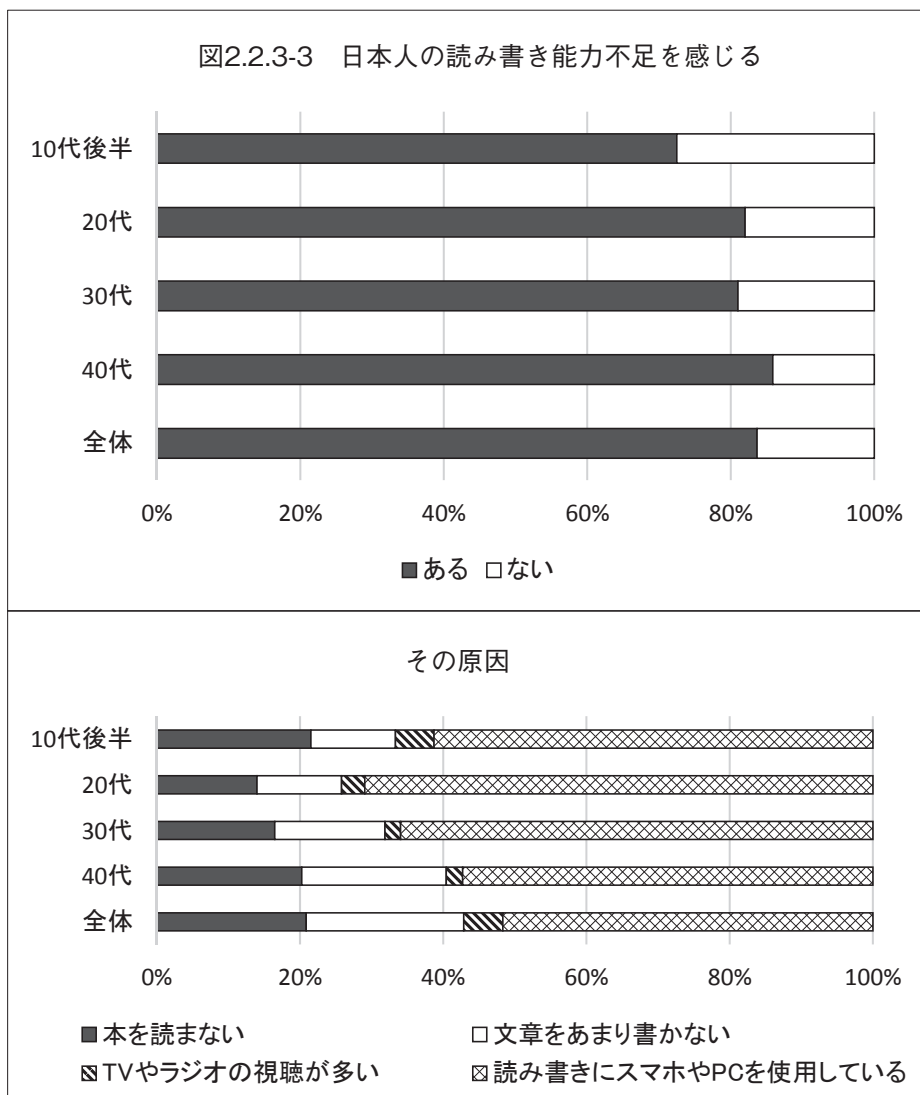


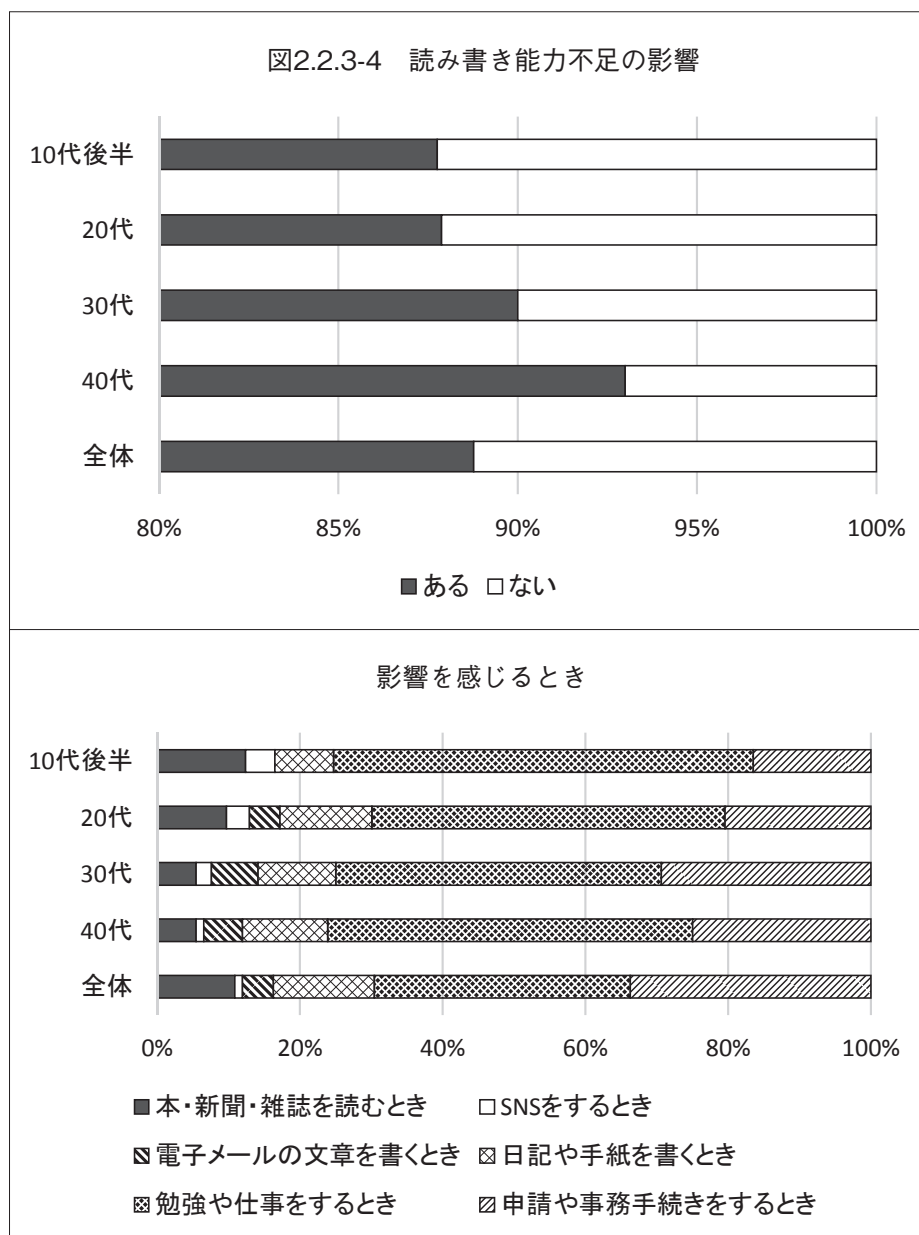
※2019 年調査の「ビデオ・DVD」項目は「ネット動画」の値を示す。

※ 読書世論調査より作成。

上記の図からは、本を読む人でもその時間は概ね1時間以下、10代後半では徐々に減少傾向であること、社会的情報源として新聞は既に存在感が著しく希薄となっており、恐らくはテレビとネットにその役割を明け渡しつつあることが読み取れる。また、マンガやビデオ・DVDすら視聴時間が減っており、2019年調査では「ビデオ・DVD」の項目がネット動画に変わったように、SNS及びネット関連のコンテンツが娯楽と可処分時間の中核を占めつつある趨勢が顕著である<sup>15)</sup>。

ただ若者自身も現状を必ずしも肯定的にとらえているわけではない。読書世論調査2018年版で設けられた設問「日本人の読み書き能力が不足していると感じるかどうか、その原因、その影響の有無と影響を感じるとき」では、若年層もまた年長世代と同じ問題意識を共有している。





※ 読書世論調査 2018 年版より作成。

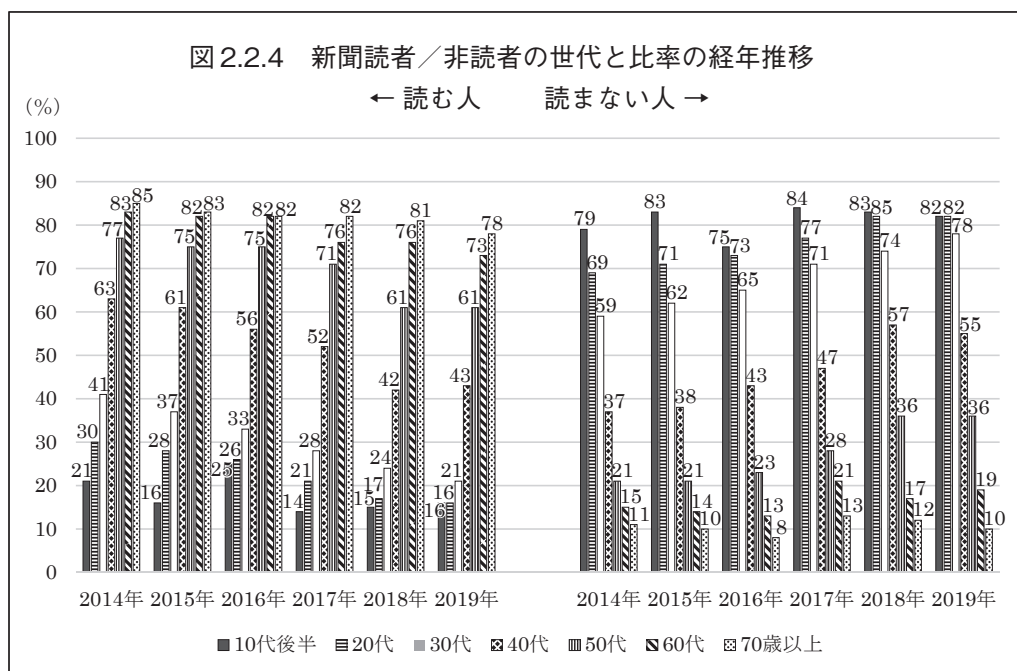
ここからは若者世代もまた読み書き能力の不足を自覚しており、それがネットに多大な時間を割いていることがその一因で、潜在的に読書の必要性和、読み書き能力を向上させ身につけなければならないと認識していることが現れている。

## 2.2.4 学生の ICT 能力の低下

これは家庭環境などの要素もあるため、一概に学生にその責を帰すことはできないが、

プロ顔負けの ICT 技術を誇る者が居る一方、PC 操作はおろかスマホ・ネットについても基本的な知識を欠き、ブラックボックス状態で「消費者」として放置され続ける者もある。「文書表現演習」における指導の一環として、大学公式メールの取得を義務付けたところ、予想以上に躓きが多くその対応には正直一教員の手に余る状況に陥ったこともある。現在は学生向けにも ICT の相談窓口が開設されているが、事実上最後まで初歩的 ICT 技術も修得できないまま卒業し社会に出る学生を看過せざるを得ない状況には些か考えさせられるものがある。少なからぬ学生で提出物の書式設定すらままならない実態は、現状の自己啓発科目で ICT リテラシーの「科目」を開講するのみでは十分には対応しきれていないことを意味し、また学生にとっても、必要な際に必要な操作をどこに聞けばよいか当惑している様子が窺える。既存の自己啓発科目と、個別の学修支援とで役割の切り分けの検討が必要であろう。MS-Office や学内システムに限らず「検索術」や「ネットリテラシー」など、科目化するに至らない講習や相談窓口の設置こそは拡充が求められているということではないだろうか。

リテラシーについて付言するならば、更にもう一つ別の要素を考慮する必要がある。学生の情報源がほぼネット経由に移りつつあり、かつ SNS などエコーチェンバー現象の中で多様な情報に触れることが困難になりつつある中で、いかに社会的リテラシーを涵養するかについてである。読書世論調査の統計によれば、学生世代すなわち 10 代後半から 20 代にかけての世代は、既に大半が情報源として新聞を利用していない。



※ 読書世論調査より作成。

逆に新聞を読む世代は40代以上の年配層に明確に偏在しており、それも40代では顕著に減少傾向に転じている。従来幅広い世代に等しく社会の情報を提供してきた新聞が大きな岐路にたっていることは明白である。その点で新聞を取り入れた授業設計とした「文章表現」科目で、若者の情報環境の激変により、結局は学生にとっては授業の「教材」以上の捉え方をされていないことを示した報告は示唆的である。(見尾 2013)

確かにネット上の情報は元をたどれば多くが通信社・新聞社が発信源ではあるものの、今後若年層に提供される情報環境としては新聞的な「一覧性」を欠いた断片的なものとなる公算が強い。SNS 経由の情報が(時にフェイクニュースを含みながらも)大きな影響力を示す所以である。

とはいえ変化の激しいネットからの情報収集術は、一方でたちまち表層的な How to に流れる危険性もある。井上(2008)のいう読書とライティングにより培われる「知識の構造化」、すなわち情報の奔流から自身を客体化し新たな発見へといざなう教養の構築は、今こそいっそう貴重であるといえる。

読書と文章作成は、「定見を養う」という意味で人の思考の根幹をかたちづくる作用があるといえる。だとすれば、情報教育のスキルとともに、自身の軸を立てる読み・書きの教育が両輪として存在することが必要であろう。

#### 2.2.5 「一過性」の問題

さて、本来これらの読書と日本語ライティング科目における学びは、他の科目においても反映され波及していく相乗効果が期待されるものであり、初年次教育のカリキュラムとして組み込まれることには一定の合理性が認められよう。問題は、「読書及びライティング科目」で培われた能力が、その後の他の(専門)科目においても発揮され活用される環境にあるかどうかである。かりに他の科目で特段読書・読解力を要求されず、文章で表現することも求められない内容・試験であるならば、読書とライティングは結局のところ学生に「一時的にやり過ごす」対応をとらせるに過ぎず、真摯に読書とライティング能力の体得に勤しむインセンティブを根底から欠くことになる。この点について、学生の視線からは現状はどのように映っているであろうか。

現代ビジネス学科のカリキュラムは、①必修科目をはじめとする短大生のみが開講されている科目、②或いは短大生を主体に四大生にも開放されている専門選択科目と、③総合基礎科目や言語教養科目・資格対策等の自己啓発科目、及び四大の枠で開講され短大と相乗りになっている専門選択科目の3つで構成されている。

##### ①必修科目

- ・ ライフデザイン演習Ⅰ・Ⅱ／基礎演習Ⅰ・Ⅱ
- ・ 文書表現演習Ⅰ・Ⅱ／文書表現演習Ⅲ・Ⅳ
- ・ 時事問題演習Ⅰ・Ⅱ／時事問題演習Ⅲ・Ⅳ



- ・ ビジネス英語Ⅰ・Ⅱ／ビジネス英語Ⅲ・Ⅳ

②専門選択科目

(短大生中心の開講科目)

- ・ ビジネス実務Ⅰ・Ⅱ
- ・ オフィスマネジメントⅠ・Ⅱ
- ・ ビジネス実務演習Ⅰ・Ⅱ
- ・ ビジネス・情報関連法規
- ・ ホスピタリティマネジメント概論／ホスピタリティ演習
- ・ ホスピタリティサービス論／ホテルマネジメント論
- ・ フードサービスマネジメント論／トラベルマネジメント論／エアラインマネジメント論／リゾートマネジメント論／ファッションビジネス論
- ・ ソーシャルビジネス論
- ・ 社会貢献とビジネスⅠ・Ⅱ
- ・ 国際観光論Ⅰ・Ⅱ
- ・ サービスマーケティングⅠ・Ⅱ

③(四大との相乗り開講科目)

- ・ 入門ミクロ経済学Ⅰ・Ⅱ／入門マクロ経済学Ⅰ・Ⅱ
- ・ 日本経済入門Ⅰ・Ⅱ
- ・ 日本経済史Ⅰ・Ⅱ
- ・ 経済史概論Ⅰ・Ⅱ
- ・ 統計学Ⅰ・Ⅱ
- ・ 経営学総論Ⅰ・Ⅱ
- ・ 現代企業論Ⅰ・Ⅱ
- ・ 簿記原理Ⅰ・Ⅱ／上級簿記Ⅰ・Ⅱ
- ・ 会計学原理Ⅰ・Ⅱ
- ・ リスクと保険Ⅰ・Ⅱ
- ・ 国際経済論Ⅰ・Ⅱ
- ・ 経済政策論Ⅰ・Ⅱ
- ・ 金融論Ⅰ・Ⅱ
- ・ 財政学Ⅰ・Ⅱ
- ・ 観光学入門Ⅰ・Ⅱ
- ・ 観光地理学Ⅰ・Ⅱ
- ・ 観光経済学Ⅰ・Ⅱ／観光経営学Ⅰ・Ⅱ

これらに加えて八王子キャンパス全学生対象の総合基礎科目、言語教養科目、自己啓発科目及びエコビジネス関連の科目が開講されている。

以下に示すのは、2018年度の現代ビジネス学科全学生を対象に、受講科目の試験形式についてのアンケート結果である。調査内容は、上記カリキュラムに記載されている科目のうち履修経験のある科目の期末試験形式について、①試験なし：平常点及び授業内のプレゼンテーションなどにより評価をつけるもの②筆記試験：記号選択や語句穴埋め、単文説明など記述量が少なめのもの③長めの論述やレポートなど長文作成を要求されたものの、の3種の区分を問うた。当時の本学科在籍数110名（1年次69名・2年次41名）全員より回答を得た結果を整理したものが次のグラフである。

図 2.2.5-1 短大向け科目試験形式

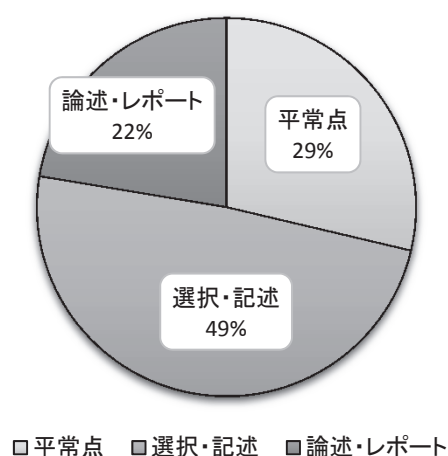
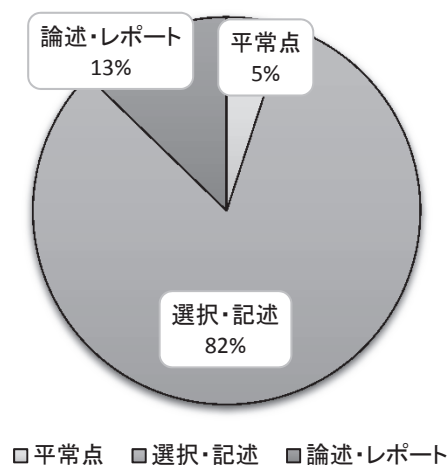


図 2.2.5.2 四大相乗り科目試験形式



以上2つのグラフで顕著なように、短大対象科目で（文書表現演習を含むこともあり）期末試験が論述・レポートとなる比率が高い一方、四大及び全学対象の科目では、論述・レポートの比率は低く、単語・短文レベルで解答させる試験形式が大半を占めていることがわかる。

文章作成能力を発揮する機会が乏しければ、結果的に文章作成は「運が悪いと出くわす」一過性の負荷の高い課題の域を出ず、在学中に体得しようとする動機づけが働かないことは明らかであろう。文章作成能力を一過性のもので終わらせないためには、在学中のカリキュラムにおける各科目でも折に触れ関連する書籍を読ませ、まとまった文章を作成する仕組みを設けることに加え、その機会をあたかも漆を塗り重ねるように繰り返し回数を重ねるものとする必要がある。

### 3. 考察

以上より「文書表現演習」科目のもたらした効果と浮き彫りとなった課題、そして今後の展望について検討したい。まず言えることは、識字にはじまるリテラシー支援、ライティング指導に始まり、最終的に「成果論文」提出を目指す現行の授業計画は、入学前に自発的に取り組んだ読書冊数がほぼゼロであった学生の大半を、年平均10～20冊近くを手にとらせるかたちで読書経験に導くものとなっている<sup>16)</sup>。

特に2年次の「成果論文」で要求している、自身でテーマを設定し、先行研究を調べ、必要な文献を探して読み、必要な論点を「体系化」して「論文」として仕上げていく授業内容は、学生には少なからぬ負担である一方、真摯に取り組んだ学生は論文を仕上げる過程で確かに（論文の内容から見限る限り）「何か」を得て長足の知的成長をみせることが多い。その一因は、読書と組み合わせられた文書表現の授業を契機として、学んだ知識を体系化し、「引き出し」をつくりアウトプットするプロセスを体得したことによるとと思われる。図らずも、現状の授業内容は、「ディスカッション」こそ明示的ではないものの、「文献購読」「論文執筆」を通じ、結果的にクラシックな「ゼミ」教育の実践に近づいたものとなった。

本科目における試みは、大学教育におけるライティング指導実践の整理類型（大場・大島（2016））からは「リメディアル的学修要素」から「論文・レポート」という専門教育への橋渡しまでも視野に入れた——学生の半数が四大編入を志望する以上そのようにならざるを得ないが——比較的幅広い課題を視野に入れた取り組みとすることができる。そしてこうしたライティング実践の科目が基礎教育の段階にとどまり、（専門科目・高年次科目での実践例の希薄さもあり）高年次科目との連携・カリキュラム全体の授業設計の検討が必要であるとする大場・大島（2016）の指摘と図らずも同じ課題に到達した。

近年はアクティブ・ラーニングが推奨され、しばしばそれは「グループワーク」等外形

的な様式と誤解されがちであるが、表面的には個別・静的でありながら、知的には高度な能動性を重視するという点で、「読書と思考、文章作成」のセットもまた「能動的学習」といえるのではないだろうか。私見では、読書は一義的には個人的な営為であり、(図書館へ足を運び、読書への入り口を示す効用には一定の効果を認めるものの) 集団でのイベント的なものとして行う近年の趨勢<sup>17)</sup>には些か違和感を禁じ得ない。実際短大生の様子を観察する限り、イベントに参加するよりはむしろ単独の取り組みの方が向いている印象をもつ<sup>18)</sup>。論文テーマの選定から見る限り、短大生の関心の方向性は実に多様であり、全員が単一のテキストに向かう輪読的な授業設計を困難とする一方で、学生の趣味嗜好と教員の適切な助言・情報提供がうまくかみ合った際は、長足の進歩をみせる事例がみられる。その点で読書と文章・論文作成もまた、時間的制約による対話的要素の確保や、どうしても自発性を発揮できないままとする学生の存在が課題ではあるものの、学生の「能動的・主体的」な姿勢を引き出し、知的成長を促す「能動的学習」に値するものといえよう。重要な点は知識を体系的なものとして学び、知識だけではない想像力や洞察力を体得してもらうことであり、これこそが生きた教養と呼べるものとなるであろう。

読書の効用を、筒井(2006)は「読むことが、人の話つまり授業を聴くこと・理解することの質を上げ」「…読解力と表現力の向上にとどまらない、…ノートをとる技量を上げ、しかし授業内容の完璧なコピーの作成に飽き足らず、自分なりに疑問点を出したり重要点をまとめたりするという前進的授業理解を促進する」「[大学での学びの]レディネスを高める」効果、つまり大学／短大での学びの基礎体力を培うことと喝破している。

今後探求されるべきは、まずこうした学びの根幹が一過性で終わらないよう適切な支援やカリキュラム設計を整えること、そのうえで現状の現代ビジネス学科のカリキュラムについて、2年間在籍したトータルで、学生たちに「何を学んだ」として送り出せるかが問われるであろう。論文テーマの模索時に「ビジネスに関連あるテーマで」と求めると途端に当惑顔になったりするあたりに、「現代ビジネス学科」トータルとして何を学んで出ていくのかについての「学び」の再定義が必要であることを示唆している<sup>19)</sup>。

受講した学生の得た成果や、適切な成績評価基準(ルーブリック)の提示により、学生自身を自己調整型学習者へと促す今年度より緒についた取り組みなど論じ残した点は少ないが、これらについては別稿に譲りたい。

## 注

- 1) 公式サイト参照、[http://www.teikyo-u.ac.jp/faculties/junior\\_college/policy.html](http://www.teikyo-u.ac.jp/faculties/junior_college/policy.html)
- 2) 同じく公式サイトより、[http://www.teikyo-u.ac.jp/faculties/junior\\_college/policy.html](http://www.teikyo-u.ac.jp/faculties/junior_college/policy.html)
- 3) 当初漢字テキストにはレベルが明確に区分されている漢字能力検定学習用テキスト『漢検〇級漢字学習ステップ』のシリーズを採用し、初回のプレースメントテストの結果に応じて2～3級のテキストを指定、各レベルごとに(書き取り中心の)テスト問題を作成・実施するとともに、60%以上の得点維持を成績評価の要件とした。しかし実際には漢検3級＝中学卒業程度か

ら準2級・2級と学力にばらつきのある学生それぞれに対応したテスト作成と採点は教員の負担が大きい上、期待に反して上の級のテストに挑む動きが生まれず、学生が徒に漢字練習のノート提出とチェックによる補填措置に拘泥、停滞をみせるに終始したことで、漢検2級になると実用性を欠く仏教用語などが増えることもあって、3年程でこの方針は取りやめた。その後は山野ほか(2010)及び就職試験情報研究会(2016)など短大生向けの一般教養試験テキストを一時活用した。これらは学生にとって到達水準を示す点で効果はゼロではなかったが、段階的なステップアップが実感しにくかったせいか、学力の伸びが明確には認められなかった。結局2020年度からは大学受験参考書より円満字(2019)を指定し、自習を前提にテストを作成、実施している。学生にはテストの成績は(読み・書き共)80%以上の水準に達した際に加点要素として平常点に加算するとだけ伝えているが、努力の方向が明確になったためか、1年次では授業終盤に向け成績が上向きつつある。

- 4) 但し学生の興味関心は流動的であり、かつ2019年度より成果論文のテーマには学科の特色を加味して「ビジネス」に関わる要素をいれるよう求めているためか、現時点では1年次の興味関心と成果論文で選ぶテーマは必ずしも一致していない。
- 5) 2020年度は新型コロナ肺炎の流行により、LMS操作を通じたやりとりが最優先となった。
- 6) 自らの書いた文章を、教員から「正解を示され、それを真似る」のではなく、相互に他人の書いた文章を参照しながら自分なりにあるべき形を模索することは、学生にとっても「提出しっぱなし」に流れず再度顧みる機会になるようで、気を長くもつ必要はあるが時間をかけて取り組むことで一過性ではない効果を生むようでもある。
- 7) 詳細については中嶋・辺見(2013)を参照のこと。
- 8) wikipediaを活用し、各国語版による記載の相違などを体感させる授業実践としては小川(2012)などがあるが、本学の場合、各学生の興味関心の方向が多様で共通して関心を持って取り組む題材を絞り難かったこと、また当時各学生にPCを手配することが難しかったことにより実現には至らなかった。但しいずれは学生自身がネット上の発信者として思わぬトラブルに直面する可能性を考慮し、何らかの手立てを講じていく必要があると思われる。
- 9) 出所は伏せ明治大学経営学部「レポート・論文作成法」科目優秀論文選『蒼樹』掲載のものを同年代の手によるものと参考にした。同世代がここまで完成度の高いものを仕上げてくるといふ発見は学生に相応の奮起を促す効果があったように思う。
- 10) 「労働関係論文優秀賞・受賞論文一覧」を参照。
- 11) SNS上の情報を参考にこのようなゴム印を作成、使用している。

**改行不要      接続詞不適切**

**根拠が必要      段落一字下げ**

**説明不足      誤字脱字**

**単なる感想      論理の飛躍**

**一文が長い      段落変え**

**文体不一致      要推敲 出典?**

**図表に番号・タイトル**

**Good! 書式?**

**口語・体言止め不可**

**主語述語の不一致**



- 12) 2019 年度からは、論文のデータ提出をも義務付け、i-Thenticate を活用した剽窃チェックをも行うこととした。なお短大生に関しては（事前に警告してはいるが）コピー等は極めて稀である。
- 13) 論文の出来が未熟とはいえ、そのみで学生の人生を左右する卒業延期に踏み切るには、教員側にも抵抗感があることは想像に難くないであろう。
- 14) 或いは近年 SNS 経由でのハッシュタグ検索に慣れきっている、言い換えれば自前でキーワードを考え出す努力が必要なくなっている影響が出ている可能性もある。
- 15) 既に語学の授業では、CD 音源の再生機器が自宅にないため、模範音声はネット配信へと転換が進んでいるように、各家庭におけるメディア環境がスマートフォンを端末とするネット前提へと移り変わりつつある変化がその背景にあると言えるであろう。
- 16) これには当然負の側面もあり、「ただでさえ読書嫌いだったところが更に助長された」との指摘があったことにも触れておくべきであろう。
- 17) 大倉（2014）、岡野（2016）をはじめとする「ビブリオバトル」等を活用した読書を盛り上げるイベントの活用や、中嶋・辺見（2013）、橋本・桑原（2018）など図書館活動と一体化したムーブメント化を指す。
- 18) 本来 1 年次に実施する「読書術」は web 上での双方向のコミュニティにおける読書体験である筈だが、現時点ではチューターの指示に従い課題を提出する「形式上こなしている」以上の効果を認めたいのが実情である。但し読書の「方法」を可視化する点では 2 年次以降にその効果があらわれたと判断される場合があることを付け加えたい。
- 19) 学生は教員に気兼ねして「ふりかえり」などではそれらしく振舞うが、別の文脈では授業の内容は実のところほとんど憶えていない、と吐露することもしばしばである。

#### 参考文献（授業構成上参照したものを含む）

- 井上千以子 2008『大学における書く力考える力——認知心理学の知見をもとに』東信堂
- 浦田葉子 2017「大学図書館での読書推進：その背景と今後の活動への視点」『愛知学泉大学現代マネジメント学部紀要』6（1）
- 円満字二郎 2019『語彙力をつける入試漢字 2600』筑摩書房
- 大倉真人 2014「ビブリオバトルを通じた教育プログラム」『経営と経済』94（1・2）
- 大場理恵子・大島弥生 2016「大学教育における日本語ライティング指導の実践の動向——学術雑誌掲載実践報告のレビューを通じて——」『言語文化と日本語教育』51 号
- 岡野裕行 2016「ビブリオバトルを通して読書について考える」『情報の科学と技術』66（10）
- 小川快之 2012「東洋史学専攻の大学生による Wikipedia 検証作業の試み—学生の自己検証能力の育成を目的として—」『漢字文献情報処理研究』13
- 河野勝 2017「公論 2017 安倍政権を問う なぜ安倍内閣の支持率は復活するのか」『中央公論』131（11）
- 関西大学ライティングラボ・津田塾大学ライティングセンター編 2019『大学におけるライティング支援 どのように＜書く力＞を伸ばすか』東信堂
- 関西地区 FD 連絡協議会・京都大学高等教育研究開発推進センター〔編〕2013『思考し表現する学生を育てる ライティング指導のヒント』ミネルヴァ書房
- 小針誠 2018『アクティブラーニング 学校教育の理想と現実』講談社
- 清水明美、加藤清、武田明子、岩沢正子、福沢健 2011『Practical 日本語—文章表現編 成功する型』おうふう
- 就職試験情報研究会 2016『短大生の就職 15 日間スピードマスター 一般常識問題集』〈2018 年度版〉一ツ橋書店

- 菅邦男、小橋智子、山元奈々、羽生由三子 2016「大学図書館における読書指導 ～漫画コーナーの設置とその効果～」『宮崎国際大学教育学部紀要教育科学論集』3
- 滝川好夫 2014『卒業論文・修士論文作成の要点整理 実践マニュアル』税務経理協会
- 筒井美紀 2006「ノートをとる学生は授業を理解しているのか?--<大事なところは色を変えて板書してほしい>=83%>を前にして」『現代社会研究』9
- 帝京大学メディアライブラリーセンター 2020「2019年度 図書館基本統計」
- 東谷護（編著）2019『表現と教養 スキル重視ではない初年次教育の探求』ナカニシヤ出版
- 中嶋康、辺見純子 2013「<共読ライブラリー>が創る「人」「本」「学び」の未来 ～帝京大学メディアライブラリーセンターにおける学修支援～」『大学図書館研究』97号
- 日本漢字能力検定協会（編）2012『漢検2級漢字学習ステップ』（改訂3版）日本漢字能力検定協会
- 日本漢字能力検定協会（編）2012『漢検準2級漢字学習ステップ』（改訂2版）日本漢字能力検定協会
- 日本漢字能力検定協会（編）2012『漢検3級漢字学習ステップ』（改訂3版）日本漢字能力検定協会
- ニルソン, L.B. (美馬のゆり・伊藤崇達監訳) 2017『学生を自己調整型学習者へ育てる アクティブラーニングのその先へ』北大路書房
- 野矢茂樹 2001『論理トレーニング101題』産業図書
- 野矢茂樹 2017『大人のための国語ゼミ』山川出版社
- 橋本信子、桑原桃音 2018「正課内教育および正課外活動における読書推進活動の展開：流通科学大学初年次科目「文章表現Ⅱ」の取り組み」『流通科学大学高等教育推進センター紀要』3
- 羽田貴史（編）2018『グローバル社会における高度教養教育を求めて』東北大学出版会
- 毎日新聞東京本社 2019『読書世論調査 2019年版』
- 毎日新聞東京本社 2018『読書世論調査 2018年版』
- 毎日新聞東京本社広告局 2017『読書世論調査 2017年版』
- 毎日新聞東京本社広告局 2016『読書世論調査 2016年版』
- 毎日新聞東京本社広告局 2015『読書世論調査 2015年版』
- 毎日新聞東京本社広告局 2014『読書世論調査 2014年版』
- 毎日新聞東京本社広告局 2013『読書世論調査 2013年版』
- 毎日新聞東京本社広告局 2012『読書世論調査 2012年版』
- 毎日新聞東京本社広告局 2011『読書世論調査 2011年版』
- 毎日新聞東京本社広告局 2010『読書世論調査 2010年版』
- 毎日新聞東京本社広告局 2009『読書世論調査 2009年版』
- 松浦照子（編）2017『実践 日本語表現：短大生・大学1年生のためのハンドブック』ナカニシヤ出版
- 見尾久美恵 2013「医療系短期大学生の新聞閲読アンケートに見る大学生の情報収集の動向」『川崎医療短期大学紀要』33号
- 明治大学経営学部 2018『蒼樹』第12号
- 山野晴雄、河西章夫、石塚浩孝、能登進、森健介 2010『一般常識チェック&マスター—短大生・専門学校生の就職筆記試験対策』実教出版
- [独法] 労働政策研究・研修機構「労働関係論文優秀賞・受賞論文一覧」  
<https://www.jil.go.jp/award/ronbun/bn/index.html> (2020年9月20日確認)
- 渡辺哲司・島田康行 2017『ライティングの高大接続 高校・大学で「書くこと」を教える人たちへ』ひつじ書房